

TART プロジェクト

会津・漆の芸術祭 2010 福島県喜多方市 2010.10 参加学生：能舞台美術 7 名、展覧会 13 名



農閑工芸を活用する教育プログラムを 考えるきっかけとなった取り組み。

TART プロジェクト

本活動は、芸術表現による地域貢献プロジェクトである。TART（タルト・筑波大学アートプロジェクトの略）の活動は、地域の人や文化と触れ、そこに内在する価値を学生の視点から見つめ直すことから始めた。本プロジェクトを立ち上げるきっかけとなった「会津・漆の芸術祭」と連携して実施した。

会津・漆の芸術祭

平成 22 年 10 月 2 日～ 11 月 23 日にわたり福島県会津若松市・喜多方市・三島町・昭和町において「会津・漆の芸術祭」が開催された。福島県立博物館が起点となり開催する「漆」をテーマとした芸術祭である。漆の文化は会津の地域ブランドであり、地域資源のひとつである。漆芸の技術者のもとより、さまざまな現代アートの担い手達、約 100 組が「漆」の可能性を探る作品やワークショップを博物館や町のなかに展開した。

能舞台

企画：宮原克人

設計：塩満俊彦

制作：赤木春菜、足立まりな、柵瀬茉莉子、圖子哲哉、中尾文哉、成田敬

大和川酒蔵北方風土館

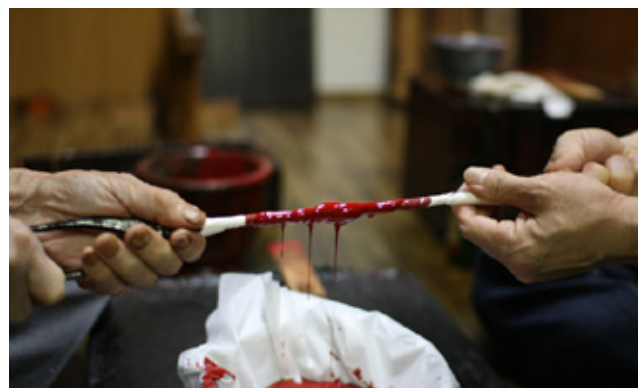
我々の活動は、大和川酒造で行う事となった。大和川酒造は江戸時代中期の寛政二年 (1790) 創業以来、九代にわたって酒を作り続けてきた。現在、酒造りの場は近くに位置する飯豊蔵に移されるが、それまで酒造りに使用されていた蔵は風土館として酒造りに関わる資料の展示や酒類の販売を行っている。



大和川酒造の協力を得て TART の活動が始動した。永く酒造りに使われてきた蔵は圧倒的な存在感を持つ。そのような環境において活動できる幸運な機会を得た。TART は漆に関わるものや地域社会のリサーチからプロジェクトのテーマを絞り込んだ。様々な可能性を探りながらも、制作工程に焦点を絞った。「仕事のかたち」というタイトルを得たプロジェクトは3つの形に展開した。

1. ワークショップ「漉し殻プロジェクト」

漆塗りの工程では、わずかなほこりや塵を嫌う。特に上塗りには、漉し紙を通して濾過された漆を用いる。使用された漉し紙は漉し殻となって再利用されながらも廃棄される。そのような、制作の工程で消費されていく漉し殻には、漆の生々しい形跡が残り、様々な表情が生まれる。また、扱う者により異なる表情となるため、多くの漉し殻を収集し表現の素材とした。「会津・漆の芸術祭」にかかわる喜多方・会津の技術者を中心に青森、京都、東京、長野等の教育機関や作家、技術者等からも収集し、およそ 600 枚の漉し殻が集まった。それらの漉し殻は蔵の空間に構成し展示した。完成された漆器からは見ることでできない漆の生々しい表情を作品化することで、鑑賞者の興味を引き出し、漆の魅力を伝えることができた。作り手の仕事、それ自体を視覚化する試みであった。



漉し紙で漆を漉す



能舞台

2. 能舞台美術制作

「会津・漆の芸術祭」が主催するイベントの一環である会津能楽会による公演を演出した。ワークショップで収集した漉し殻を活用した舞台美術制作を行った。それとともに、照明計画、ライトアートの設置、ポスター制作等全体の構成を行った。大和川酒蔵を舞台に、会津地方の文化的資源である漆、能、酒蔵を結びつけるイベントとなった。11月15日に行われた大和川酒造主催の「えびす講」に合わせ実施した。毎年行われてきたえびす講は、220 回目の開催であった。

3. 作品展 （開催期間 11 月 4 日～ 23 日）

大学院生と学群生、合わせて 14 名が参加した。展示会の会場となった大和川酒造で酒造りに使用されてきた麴蓋を作品に取り入れ、それぞれ表現した。ギャラリー、美術館等の展示空間とは異なる複雑で変化に富んだ空間での作品展示は、制作された作品、展示空間の両者にとって新たな魅力が与えられた。



TART 作品展

企画：宮原克人

作品：赤木春菜、荒谷翔、遠藤章子、小俣隼人、倉持広美、柵瀬茉莉子、
圖子哲哉、中村友貴、成田敬、福島梓、福田藍、古山菜摘、原裕也

本プロジェクトは、大和川酒造、漆芸に関わる人々や組織、会津能楽会等から多大なる協力を得て福島県立博物館との連携で実施された。博物館との連携は、地域社会における人的交流が促進されるなど、今回のプロジェクト進行にとって有効に働いた。大学での教育環境と異なる学外での実践的なプロジェクトは、地域社会との交流・協働により、流動的に進行していく。企画や運営面では様々な局面において機動性・柔軟性が必要となり学生の実践力や応用力が鍛えられた。個性を重視した表現を目指すことが多い芸術分野の学生にとって、地域と交流しそこにある事象の中から、そこにある物や事を使って新たな創造に向かうという過程からは多くを学ぶ経験となっただろう。